

## 在日外国人の名のり行動における関連要因の検討

### - エスニック・アイデンティティ研究の一視点 -

東京理科大学            竹尾 和子  
白百合女子大学        矢吹 理恵

## How Long Term Foreign Residents Choose Their Name : An Analysis from the View Point of Ethnic Identity

Tokyo University of Science        TAKEO, Kazuko  
Shirayuri College                    YABUKI, Rie

日本に中長期在住する外国出身者を対象にインタビュー調査を実施し、日本における名のり行動とその関連要因について探索的な検討を行った。その結果、名のりの関連要因として、6 要因（「出身文化の名前への愛着・思い入れ」「家族関係（重要他者）」、「利便性 1 / 受け入れ社会における外国名の受容度」「利便性 2 / 名前の形態（音韻形態・文字形態）の受け入れ社会での受容度」「受け入れ社会での流行」「国籍（帰化の有無）」）が抽出された。これらの要因は個人的要因と社会的要因に分類され、名のり行動が個人の心理的傾斜と社会的制約のせめぎ合いの中で成り立つことが示唆された。

**【キー・ワード】** 名前, エスニック・アイデンティティ, 在日外国人

The purpose of this research is to identify the major factors influencing foreign residents living in Japan in their choice of official names and how they use those names in social and private situations. Seven foreign residents from China, Korea and Taiwan are interviewed and five factors - Interviewees' affection for their own names, Folks' attitudes to their foreign names, Reaction of the public to their foreign names, Social trends in the Japanese society, Nationality - are extracted. These factors - divided into individual and social factors - demonstrate that the informants' naming behavior is constructed through interaction between two main factors - personal preference and social constraint.

**【Key Words】** Name, Ethnic Identity, Foreign Residents in Japan

## 問 題

文化と心との関係を扱う心理学研究の主流として、比較文化心理学と文化心理学が挙げられる。比較文化心理学では、文化間の差異に研究の主眼がおかれ、その差異が形成されるまでのプロセス、つまり、個人の文化化の過程については、ほとんど扱われてこなかった。対して、ヴィゴツキーなどの口

シア心理学派を主流とする文化心理学は、個人が文化的実践活動に参入することで、個人の心理発達が歴史的文化的媒介物を介して展開される側面に関心が向けられてきた。しかし、その所産としての、文化的特質(比較文化心理学で検討されてきた文化間の差)についてはほとんど扱われてこなかった。文化的差異に主眼を置く比較文化心理学と、文化化のプロセスに主眼を置く文化心理学の溝は埋められないまま、現在に至っている。本研究では、日本に中長期在住する個人が自文化と他文化の差に直面し、そのギャップを乗り越えようと、主体的に自己や文化についての認識やそれに伴う感情や動機を変容させる過程に注目する。そこには、文化差を扱い続けてきた比較文化心理学のテーマと、文化化の過程を扱い続けてきた文化心理学のテーマが、具体的に織り込まれている。その点において、異文化接触に伴う心理的变化を解明するという本研究の試みは、従来の比較文化心理学と文化心理学の溝を埋める可能性を持つ、注目すべきテーマと言えよう。

また、日本への外国人の入国は増加の一途をたどっており<sup>注1</sup>、在日外国人を対象とした異文化接触に伴う心理的变化に関する心理学的研究は、今日の実際の問題としても重要である。日本における異文化接触の心理学的研究としては、主に、(1) 日系移民の研究(林, 1987; 前山, 1982), (2) 海外駐在員・海外子女・帰国子女といった日本人の適応に関する研究(江淵, 1988; 南, 2000; 箕浦, 1984; 斉藤, 1988), (3) 在日外国人(留学などの短期滞在)に関する研究(長井, 1988; 井上・伊藤, 1997; 田中・藤原, 1992; 周, 1993; 1995; 早矢仕, 1997; 山崎, 1994a; 1994b; 藤谷・山本・坂本, 2001; 長井, 1988), (4) 在日外国人(中長期滞在や永住)に関する研究(中原, 2003; 中村ほか, 1994; 辻本, 1998; 平・川本・慎・中村, 1995)に大別される。いずれも今日的で重要な問題であるが、とりわけ、(3)(4) 在日外国人に関する研究は、日本で生活する外国人の問題に留まらず、そのホストカルチャーとしての日本文化のあり方や、そこに生きる日本人のあり方にも関連する問題である。在日外国人に関する研究については、留学生・就学生などの短期滞在者の研究では、主にホストカルチャーへの適応の問題が研究テーマとされるのに対して、永住者を対象とする研究では、しばしば、エスニック・アイデンティティ<sup>注2</sup>の問題が取り上げられる(平ほか, 1995; 辻本, 1998)。これは、エスニック・アイデンティティの問題が、異文化に長期に関わることによってこそ現れる問題であり、エスニック・アイデンティティが、中長期滞在者や永住者の心理を理解する上で重要な視点であることを示唆する。

更に、在日外国人のエスニック・アイデンティティを理解するにあたり、本人の名前の使い方(本研究では、「名のり」と呼ぶ)に注目することが有効であることはこれまでしばしば指摘されてきた(箕浦, 1994; 平ほか, 1995; 竹尾, 2006; 矢吹, 2005)。在日外国人の名のりの形態として、主に、出身文化の名前を使う場合と、日本名を使う場合が存在するが、更に、それぞれを本名として使うか、

注1 入国管理局の調べによれば、平成 16 年末現在での外国人登録者数は 197 万 3,747 人で、平成 15 年末現在に比べ 5 万 8,717 人の増加、10 年前(平成 6 年末)に比べると 61 万 9,736 人の増加となる。また、外国人登録者の我が国総人口 1 億 2,768 万 7,000 人(総務省統計局の「平成 16 年 10 月 1 日現在推計人口」による。)に占める割合は、平成 15 年末に比べ 0.05 ポイント増加し、1.55 パーセントとなっている(入国管理局ホームページ「平成 16 年末現在における外国人登録者統計について(概要)」)。

注2 平ほか(1995)は民族的アイデンティティという用語を用いている。また、箕浦(1984; 1994)や矢吹(2005)は文化的アイデンティティという用語を用いている。

あるいは通名として使うかなど多様な選択がなされている。このような名のりの多様性は、まさに彼らのエスニック・アイデンティティの多様性を示唆するものであり、エスニック・アイデンティティの理解において、名のりへの注目は興味深い視点である。よって、本研究ではエスニック・アイデンティティの象徴としての名のり行動に注目し、その形態や関連要因について検討することを目的とする。更に本研究では、次の立場にたって、この名のりの形態について検討する。

**インタビュー調査から捉えた名のり行動** 在日外国人を対象とした心理学研究のほとんどが質問紙調査に基づく。とりわけ、留学生・就学生を対象とした研究として既述したものについては、そのすべてが質問紙調査研究であった。一方、永住するエスニック・グループを対象とした心理学研究については、既述したもののうち、辻本(1998)によるインタビュー調査以外は、ほとんどが質問紙調査であった。質問紙調査とは、先行する研究者自身の理論的枠組みに基づき、教示や項目が設定されているという点において、研究者の理論的枠組みに関する検証的な機能を果たす。しかしその性質ゆえに、研究者の先行的な知識を離れた、調査対象者の視点に立った現象に対する理解を難しくする。とりわけ本研究の調査対象者は、調査者とは異なる文化的文脈の中を生きてきた人々がほとんどであり、客観的と考えられる指標であっても、それが調査者と調査対象者とで、同じような文脈の中で理解されるとは限らない。調査協力者の視点に立った現象の理解のためには、調査対象者の語りにより展開された主観的世界に出来る限り入り込み、そこから現象について理解することが重要であり、それを可能にする方法 インタビュー調査 が有効であると考えられる<sup>注3</sup>。このような観点から本研究ではインタビュー調査を実施し、そこでの対象者の語りの中から名のり行動を検討する。

#### **社会的に構築されたものとしてのエスニック・アイデンティティとその象徴としての名のり行動**

本研究では、エスニック・アイデンティティは自己の一部であると同時に、社会的に構築されたものでもあり、その二重性こそがエスニック・アイデンティティの特質であるという立場をとる(箕浦, 1994; 竹尾, 2006)。つまり、欧米を中心に展開されてきた個体主義的観点からのエスニック・アイデンティティ研究を補完するものとしての、社会構築主義的観点からの理解が必要であると考えている。このような観点からのエスニック・アイデンティティの象徴として名のり行動に注目する際、名のりが個人的な特性により規定されるだけでなく、主体を囲む外的要因によってどのように規定されるかについても注目しなくてはならない。そこで本研究では、質問紙調査に見られるような個人内要因の測定にとどまらず、主体が語る彼らを取り巻く生活世界にも焦点を向けて検討する。

## 方 法

**対象者** 関東、関西都市圏在住の外国人8名。いずれも調査者の友人に紹介され、調査時点において調査者とは初対面であった。各対象者のプロフィールはTable1のとおりである。

---

注3 しかし、インタビュー調査の重要性は、十分な質的研究を行った後での質問紙調査などの量的研究を否定するものではない。

Table1 調査対象者

番号	年齢	日本滞在年数	出身国	国籍 (帰化の有無)	名のりの形態	家族の情報	性別
S1	36	13	中国	日本	1	父は中国からの帰国者で、日本国籍。母は中国国籍。夫は中国国籍。	女
S2	45	16	台湾	台湾	2	夫は日本人。一人の息子がいる。	女
S3	31	13	韓国	韓国	2	夫は日本人。父親は外交官で、父親の日本との外交の姿を幼いころから見てきた。	女
S4	18	6	韓国	韓国	3	母と弟の三人暮らし。父は韓国で暮らしている。母の仕事の関係で、来日した。	男
S5	42	14	中国	日本	1	夫と子ども一人の三人暮らし。夫は、中国出身でS5と同じ時期に日本国籍を得た。	女
S6	57	36	台湾	日本	1	夫は日本人。二人の娘がいる。長女は台湾人と結婚	女
S7	47	15	中国	中国	3	妻と二人の息子がいる。家族はいずれも中国籍。	男

名のりの形態

1=日本名に改姓している、2=改姓なしで通称として日本名を使用している、3=改姓なしで通称でも日本名を使っていない

**手続き** 面接にあたって調査目的を対象者に伝え、了解を得て面接内容を録音した。面接結果については、匿名で公表されることについて対象者の了承を得た。面接時間は一人につき1時間から2時間。面接期間は2005年6月から11月。場所は対象者の希望により、対象者の自宅および喫茶店であった。

**本研究で使用する記号** 対象者の語りの提示については、以下の記号を使用する。対象者のプライバシーを保護するために、語りの中の固有名詞については修正を加えている。

S1～S7：対象者番号

I：インタビュー

< >：語りをわかりやすくするための補足説明

( )：語りをわかりやすくするための状況説明

……：語りの中略

：日本姓名（：日本姓，：日本名）

：出身文化姓名（：出身文化姓，：出身文化名）

：姓名以外で、姓名を連想されるような単語

## 結果と考察

本研究の対象者の来日後の名のり行動には、日本名に改姓する、改姓なしで通名として日本名を使う、改姓なしで通名でも日本名を使わない、の3種類があった。在日外国人を対象とするインタビュー調査のうち、自己の名のりに言及している語りを対象に、名のりやその関連要因について探索的に検討した。これにより、名のりに関する要因として、6件の要因が抽出された。各要因について、

典型的な語りを示しながら、以下に述べる。

### 要因 1：出身文化の名前への愛着・思い入れ

語り 1 は中国出身の女性による語りである。ここでは、出身文化の名前に対する愛着や思い入れが語られている。

#### 【語り 1】

S1：私、大好きなの。その <中国名>、<sup>1</sup> じゃないですか <中国名の意味の説明>。大好きなんですよ、は~い。もう、大好きなんですよ、あの <sup>2</sup><中国名の一部の漢字>。すごく残念で、その、言葉の発音が <日本語に>なくて……持つてる意味がすごく、そうですね、やっぱりすごく、どういう漢字で親はつけてくれているんだって思うじゃないですか。私は、ホントに、今日、向こうにいと、高校の友達とかが、中国の名前読んでくれるじゃない？ やっぱ、親しみ感がやっぱあるんですよ。それは、<日本姓名>って、それじゃなくって。昔の名前の方がとても懐かしくて、あえて、「自分だあ」って、その、あるんですよ。だからそれを、生まれ育ちのつけた名前が、どうなんだろう、とても私の意味があって、でも、私ちゃんと、中国の今の新しい、あの、高校の友達でもなく、大学の友達でもない、新しい中国人の友達にであつたら、昔の名前でちゃんと教えますよ。

日本国籍を得て、日本名を持ちながらも、出身文化の名前に対して強い愛着や思い入れがあることが語られている。親がつけてくれたものとして、また、生い立ちの中で、身近な人々が呼んでくれたものとして、出身文化の名前が、自己にとって特別な意味を持つことが読み取られる。これは名前が、本人の出身地やその地で共に過ごしてきた人々との関係、その地での経験と密接に絡みながら、本人の記憶の中に根付いていることを示唆する。

### 要因 2：家族関係（重要他者）

名のりの関連要因として、重要他者の存在があることが語られている。語り 2 は台湾出身の女性によるものであり、語り 3 は韓国出身の女性によるものである。両者とも、日本人男性と結婚をし、帰化はしていない。しかし、前者は戸籍上では出身文化の名前を使っているが、通名としては日本名を使っているのに対し、後者は戸籍上でも日常生活においても出身文化の名前を使っている。この違いにはさまざまなことが考えられるが、そのうちの一つとして、重要他者（夫）の態度や要求が関与していることが、それぞれの語りから読み取られる。

【語り 2】

I：そうですか，じゃ，そうすると，日本の女性が普通の日本の男性と結婚する時に名字を変えますよね。そんな感覚・・かな？ <日本姓・台湾名>って名のときには。

S2：いえ，それがお父さんが「日本におるときは夫の名字を呼んでもらったほうが良い」と言った。違うかな。なんか <台湾姓>っていうたらすぐなんか外人とかな。なんやかなんか言われそうかもしれないから。だからもうそのまま <夫の日本姓>。子ども<が>学校行ってる時もやっぱり子どもが <夫の日本姓>なのに，お母さんだけで <台湾姓>でな。だからちょっと子どものためにも，なんか良くないって<夫が>いいはるし。だからもう ， <夫の日本姓を繰り返す> [笑]

夫は S2 に対して通名として日本名を使うことを希望し，更に，子どものためにも日本姓を名のる方がよいとしている。夫の存在，また，夫の語りの中に登場する子どもの存在が，彼女の名のりの形態に少なからず影響を与えていることが読み取られる。

対して，S3 は戸籍上でも日常生活でも出身文化の名前を使うこと理由として特に明確な説明はしていない。しかし例えば，次の語り 3 など，語りの各所に夫が S3 の出身文化や民族性を積極的に評価し，尊重していることが読み取られる。

【語り 3】

S3：夫も，「子供が生まれたら，ぜひそれを両方の国のいいところ悪いところを全部教えて，お母さんは韓国からきた人なんだよってことを教えたい」と。「それを刻み付けたい」というのがあって。

しかし，次の語り 4 のように，S3 に対して，日本名を使うことの必要性を喚起するような他者も存在する。

【語り 4】

S3：やっぱり家族になるっていうことは，その家の人になるっていうことだから，主人の姓が <日本姓>なんですけれども， <日本姓>の姓を持つことは，私が私じゃなくなることはないけれど，「家族になるための，ひとつのプロセスだ」とって<父が>言ってたんです。

S3 は，自身の記憶の中にある父の「声」，夫の「声」といった多声性の中で，自分なりの名のりの形態を選択している。

### 要因3：利便性1 / 受け入れ社会における外国名受容度

日本で外国名を名のることは日常生活上不便があり、日本名の方が利便性があることが語られている。

#### 【語り5】

S3：「 <日本姓> <韓国名> 」で名乗ったとき、「 <韓国名> です 」って言ったときは、実生活で不便だって思うことが多々ある。くだらないこと <を> いえば電話で・・・あ、違う。契約するときでも、「 <韓国名> です 」っていうと、「え？え？」って。そういう時はめんどくさいから「 <日本姓> です。 <日本姓> です 」って言っちゃうんですけど。オフィシャルに身分証明書が必要じゃないときは「 <日本姓> 」って名のようになってきたんですけど。だからそういうことがあるから、いずれは、日本姓をとっちゃってもいいかなとは思ってますけれども。

出身文化の名前を名のることの不便さは、日本社会の外国名への非許容性、非受容性などに起因する可能性がある。そのことは翻って考えれば、日本社会の外国人への閉鎖性にもつながる問題である。要因1が示すような出身文化の名前の愛着を持ちながらも、日本社会でそれを使うことに不便さを感じざるをえないという現象について、在日外国人の問題としてではなく、日本の社会や教育の問題としても捉える必要があろう。

### 要因4：利便性2 / 名前の形態（音韻形態・文字形態）の受け入れ社会での受容度

語り6は韓国出身の男性の語りである。ここでは、外国人の名前は、日本の音韻形態にないことから日本人には発音しにくいことがある。そのことが対象者の自分の名前の認知や感情に影響を与えることが語られている。

#### 【語り6】

S4：最初はすごい嫌でしたよ。だって今も嫌なのは、人に紹介する時に何度も聞き返されるんで、もう、「こんにちは、こんにちは、こんにちは」って<自分の韓国名を>何度も言わなきゃいけないし。ええ、恥ずかしいですよ。自分の名前が発音しにくくて、聞き取りにくくて、喋りにくいってのは。嫌じゃないですか。名前っていうのはやっぱり美しく、シンプルで、分かりやすいってのが、一番理想的じゃないですか。で、「おじいちゃんは何でこんな名前にしちゃったんだろう」、みたいな。たまに思います。

更に、次に示す中国出身の女性による語り7と語り8では、出身文化の名前で使われる文字が日本の文字形態にないことから、出身文化の名前とは異なる日本名を考案したことが語られている。

【語り 7】

S5: 意味としては私<は>やっぱり自分の名前<を>そのままにしたかったんですけど、これは中国の意味は、えっとなんというの、美しい、例えば宝石とか、<宝石名>とかそのようなもの、キラキラした光っていて美しいという意味ですけど、一応父が付けてくれたんですけど、本当にそのまま付けたかったんですけど、この字はなかったので一応発音は似ているので、この字に変えたという、特に意味は…。

【語り 8】

S1: その名字自体が <日本姓>で、まあ、<を>子供ぐらいから分かってて。名前には、どうしても日本に来て、その <中国名>は、<日本人には>発音できないですね。

以上の語り 7 や語り 8 では、出身文化の名前と同様の文字形態や音韻形態が日本語にはないことから、出身文化の名前とは異なる日本名を考案したことが語られている。更に、出身文化の名前への愛着を持ち続けており、それを日本でも名のことが出来ないことに対する残念な思いが語られており、彼らにとって、出身文化の名前が心理的に重要な役割を果たしていることが読み取られる。

対して、次の台湾出身の女性による語り 9 や語り 10 が示すように、もともとの名前の文字が日本語の文字形態に存在したり、もともとの名前が日本語の名前にあることから、出身文化の名前の一部（主に氏名のうちの名）を取り入れたとするケースもある。

【語り 9】

I: あ、そうですか。 <日本名>っていう名前は台湾でもあるんですか。

S2: あります。

I: あ、そうですか。じゃあ日本でも <日本名>って言う名前がありますからね。

S2: あります。そうそうそう。もう、全く一緒に。

I: 全く一緒でありますか。だから名前だけ変えたのかなあとと思ったんですけど。

S2: ええ、変えてない。

【語り 10】

S6: あの、台湾では 2 つの名前あるんですよ。戸籍の上の名前と、普段使ってる名前はあります、台湾でも。で、あの、戸籍の上で <台湾名>という名前です、私、<台湾姓名>で。で、一般で家では「<台湾名を繰り返す>」と呼んでたので、それで日本<に>来て、日本のあの、名前、日本国籍とったと同時に、じゃあもう <台湾名>を取って、子という名前をつけたです。



要因1にあるように、出身文化の名前には対象者自身の愛着や思い入れが多分に内包されている。そしてそれは、本人の育った場やそこでの人々との関わりや印象的な経験とともに、記憶の中に留まっている。そのような出身文化の名前が、一部であっても日本名に留まるということは、出身文化とはまったく違う日本名を名のる人とは異なる安心感や安定感が存在するのではないかと考えられる。

#### 要因5：受け入れ社会での流行

韓国出身の男性による語り11では、大衆文化の流行などの社会現象が、日本人が外国名に持つイメージに影響を与えることが語られている。

##### 【語り11】

S4：しばらく前にペ・ヨンジュン（韓国俳優）とかなんか色々流行ったりしました。ああいうときにそういう名前で遊ばれましたね。様と様とか（「ペ・ヨンジュン」は日本では通称「ヨン様」と呼ばれている。）、何かあると、そういう。「お前違うってそれは」って言いたくなるんですけどね。……たまに今、ちょっと今良いのか悪いのか韓流ブームが来ちゃって、それでちょっと色々言われたりとか。そう、様とか様とか訳分かんないと言われて、「ああ、そっか、俺韓国人だもんな」って。「やっぱ言われるんだ」ってか、もう大体そういうの慣れてるから、予想はできるんですよ。ブームがくると、「ああ、俺、言われそう」って。逆にこっちのネタ作っちゃったり。

日本では2004年ごろに起こった韓国の映画やドラマなどの流行である「韓流」の影響で、周囲の日本人が自分の韓国名について言及したことが語られている。最近の韓流ブームは、日本人の韓国や韓国人への意識を大いに変えるものであった。他方、日本で暮らす韓国人にも、少なからず影響を与えている。語り11は、まさに時代的社会的現象が個人史に入り込む様相を示している。

#### 要因6：国籍（帰化の有無）

対象者の語りから、名のりの形態には、帰化（日本国籍の取得）の問題が関わるということが明らかにされた。以下に、二つの語りを提示する。語り12は帰化をした中国出身の女性の語りであり、語り13は帰化を迷っている中国出身の男性の語りである。いずれも、帰化に伴う日本での生活における利便性について言及している。

【語り 12】

S5：一応，主人はそのとき仕事<が>結構安定していて，多分暫くの間中国に帰るつもりはなかったんですね。で，さっき言ったどん底から乗り越えて，ちょっといい生活になりましたので，やっぱり安定して欲しい。それからこれからのことを考えて，主人は例えば年金とか，色々保険とか全部こちらで払っているのだからあの，これからのことを考えたら，やっぱり安定した状態に。それが，中国は一応，人口が多いので，例えば外国へ旅行に行ったりとか，そういう場合には結構大変，ビザ，どこへ行ってもビザが必要です。で，ビザ<が>とれない国は結構あるので，だから不便と思って。やっぱり自分達の生活のために，自由に動けるように，生活<が>良くなるために，そういうふうに考えて，<帰化を>決めたんですけど。……中国の考え方とか，だから帰化しても元々の国に対して，ちょっとこれからもう関係ないとか，そういうふうに考えてないから。今まで通りに自分はできることはするし，それから日本の国籍を選んで，これから日本人になるんですけど，日本社会に一生懸命頑張っについていかなければならないということで，そういうことを覚悟したので。それから日本の生活習慣とか，できるだけ日本人のようにしていきたい，そういう考えもありましたので，だから<帰化することを>決めました。

【語り 13】

S7：もう一つ，あの，日本国籍，日本のパスポート持って世界中で。どこにも行っても。んー，行きやすいですね，うん。中国のパスポートはやはり，中国に帰るのは非常に便利ですけど，他のところに行くのは結構不便ですよ。……例えばですね。あの，極端な話ですね，これは多分そういうことは起こらないと思います<が>，日本人は会社にクビ<に>されて再就職できなかったら，母子家庭なら市役所が補助をして生きていけますけど，男なら一つの方法は，大阪公園に行くと，大阪城公園ありますね，広いですね，そこにテントを建てて生活しなければならないです(笑)。中国はまだ私のような人間で何とか帰ったら仕事見つかるんじゃないかと。ただ給料低いですけどね。それは一つの，まあ特に(笑)分からないですねえ，つまり外国人はある程度，正直に言えば，もう会社<を>クビされても中国に帰るとか，そういう逃げ道はまだありますね。日本人は死ぬまで頑張らなくちゃいけないと。逆に中国人の方が幸せじゃないかと私は思ってます(笑)。

これらを概観すると，帰化を決定する背景には，1) 帰化をすることで受けられる日本の年金や保健等の社会制度のメリット(語り 12)，2) 日本のパスポートの汎用性(語り 13)がある一方で，3) 日本での外国人の雇用の不安定さ(語り 13)，4) 3) のバックアップとしての出身国での雇用のチャンスの(語り 13)が存在することが分かる。

このような日本の生活における利便性と密接に関連する帰化であるが，名前との関連で帰化について考えると，一つの疑問が浮かび上がる。それは，帰化をした場合，法律上日本名に改姓する義務はなく，出身文化の名前を名のり続けることも一つの選択肢として存在する。しかし，本研究の対象者では帰化をした対象者の全員(3名)が改姓しているという点である。帰化と改姓の連動性の背景に

は何かがあるのか。この点を明らかにするには、本研究で析出された各要因の関係性について詳しく検討する必要があり、今後の課題である。

## 総 括

本研究では、名のりの関連要因として、次の5つの要因が抽出された。

要因1：出身文化の名前への愛着・思い入れ

要因2：家族関係（重要他者）

要因3：利便性1 / 受け入れ社会における外国名の受容度

要因4：利便性2 / 名前の形態（音韻形態・文字形態）の受け入れ社会での受容度

要因5：受け入れ社会での流行

要因6：国籍（帰化の有無）

これらの要因を概観すると、その中には、個人の心理的傾斜や個人史を内包するような要因と、対人的状況や社会的状況を反映するような要因が存在する。例えば、要因1（出身文化の名前への愛着・思い入れ）はまさに前者の代表といえよう。しかし、語り1が示すような、出身文化の名前への愛着や思い入れがありながら、日本名に改姓する人は少なくない。つまり、出身文化の名前への愛着・思い入れは、他の社会的状況や制約の中で、半ばあきらめられる形で名のりの背後に隠れている。

対して、要因2, 3, 4, 5, 6は、状況要因にあたる。そのうち、要因2（家族関係〔重要他者〕）は、状況要因の中でも、具体的な対人関係を示し、その点において、他の状況要因である要因3, 4, 5, 6（利便性1 / 受け入れ社会における外国名の受容度、利便性2 / 名前の形態（音韻形態・文字形態）の受け入れ社会での受容度、受け入れ社会での流行、国籍（帰化の有無））とは、性質を異にする。

一方、要因3, 4, 5, 6は、個人や対人関係と比べて、社会というマクロな水準の中で理解されるものである。調査対象者の語りの頻度などを見ても、これらの要因が個人的な要因を凌駕するほどの力を持って、在日外国人の名のりに影響を与えていることが分かる。このことはまさに、名のりが在日外国人の個人的な問題ではなく、日本社会や日本人のあり方や態度を問う問題であることを示唆する。名のりの問題は、在日外国人にとって深刻な問題であるとともに、近年は日本人にとっても、夫婦別姓の問題としてクローズアップされている。要因1が示すように、親から授かり、生活史の中でその人を識別するものとして、さまざまな対人関係の中で機能してきた名前（改姓前）は、まさに、その人の存在、人生、ふるさとへの思いを代表するものである。そのことを配慮した名前に関する社会制度のあり方や社会全体の理解こそが、人権を真の意味で尊重する成熟した社会のあり方ではないだろうか。

最後に、外国人の名のりと彼らのエスニック・アイデンティティの関連について述べておく。在日外国人の名のりが、彼らのエスニック・アイデンティティを色濃く反映することはこれまでも幾度か指摘されてきた（平ほか、1995；箕浦、1994）。本研究では、エスニック・アイデンティティの象徴としての名のりが、個人の心理的傾斜に関連しながらも、社会的対人的現象から切り離すことのでき

ない現象であることを析出した。このことは、エスニック・アイデンティティ自体が、個人的な現象でありながらも、社会的に構築されるものであるという考え方を導くものである。竹尾(2006)は、エスニック・アイデンティティ研究において、従来の欧米におけるエスニック・アイデンティティ研究に主流であった個体主義的立場に加え、社会構築主義的立場を取り入れた両面からの解明が必要であることを指摘した。本研究の名のりの検討は、このような立場からのエスニック・アイデンティティへの理解へとつながるものと言えよう。

## 引用文献

- 江淵一公 1988 帰国子女のインパクトと日本の教育 「帰国児を生かす教育」の視点から 社会心理学研究, 3, 20-29 .
- 林 春男 1987 “Japanese American”の成立 実験社会心理学研究, 27, 1-14 .
- 早矢仕彩子 1997 外国人就学生の自己認知, 自・他文化への態度が適応感に及ぼす影響 心理学研究, 68(5), 346-354 .
- 井上孝代・伊藤武彦 1997 留学生の来日1年目の文化受容態度と精神的健康 心理学研究, 68(4), 298-304 .
- 勝谷紀子・山本直美・坂本章 2001 アジア系留学生と日本時学生の相互知覚ギャップ: 女子の大学生に対する実験, 社会心理学研究, 17, 1, 43-54 .
- 前山 隆 1982 ブラジルの日系人におけるアイデンティティの変遷 Latin American Studies, 4, 181-217 .
- 南 保輔 2000 海外帰国子女のアイデンティティ 生活経験と通文化的人間形成 東信堂
- 箕浦康子 1984 子どもの異文化体験: 人格形成過程の心理人類学的研究 思索社
- 箕浦康子 1994 異文化で育つ子どもたちの文化的アイデンティティ 教育学研究, 61, 213-221 .
- 長井 進 1988 外国人交換留学高校生の日本における適応過程 心理学研究, 59, 37-44 .
- 中原洪二郎 2003 参政権と帰化をめぐる在日韓国人の意向, その類型化と構造の分析 社会心理学研究, 19, 2, 79-93 .
- 中村俊哉・慎 栄根・平 直樹・川本ひとみ・横山恭子・高田夏子 1994 在日挑戦人学校の中学生の異文化接触体験 教育心理学研究, 42, 291-297 .
- 斉藤耕二 1988 帰国子女の適応と教育 異文化間心理学からのアプローチ 社会心理学研究, 3, 12-19 .
- 周 玉慧 1993 在日中国系留学生に対するソーシャル・サポートの次元 必要とするサポート, 知覚されたサポート, 実行されたサポートの間の関係 社会心理学研究, 9(2), 105-113 .
- 周 玉慧 1995 受け取ったサポートと適応に関する因果モデルの検討 在日中国系留学生を対象として 心理学研究, 66, 33-40 .
- 平 直樹・川本ひとみ・慎 栄根・中村俊哉 1995 在日韓国人青年にみる民族的アイデンティティの状況によるシフトについて 教育心理学研究, 43, 380-391 .

- 竹尾和子 2006 エスニック・アイデンティティ研究の視座 東京理科大学紀要 教養篇 ,38 ,229-244 .
- 田中共子・藤原武弘 1992 在日留学生の対人行動上の困難 異文化適応を促進するための日本の  
ソーシャル・スキルの検討 社会心理学研究 7 ( 2 ) , 92-101 .
- 辻本昌弘 1998 文化間移動によるエスニック・アイデンティティの変容過程 : 南米日系移住地から  
日本への移民労働者の事例研究 社会心理学研究 , 14 , 1 , 1-11 .
- 矢吹理恵 2005 国際結婚の日本人妻の名のりの選択に見られる文化的アイデンティティの構築 :  
戦略としての位置取り 発達心理学研究 , 16 , 3 , 215-224 .
- 山崎瑞紀 1994 アジア系留学生の対日態度の形成要因に関する研究 心理学研究 ,64( 3 ) ,215-223 .
- 山崎瑞紀 1994 アジア系就学生の対日イメージ形成に関する因果モデルの検討 教育心理学研究 ,  
42 , 442 - 447 .

## 謝 辞

インタビュー調査にご協力くださいました方々に厚く御礼申し上げます。また、論文執筆にあたり  
ご指導を賜りました清泉女学院大学の東洋教授に感謝申し上げます。